

付・粘土塊

SI 5 の北縁に近接して、長軸約55cm、短軸約40cm、厚さ約20cmの灰白色粘土塊を検出した。住居内に保管された土器素材である可能性が想起されたが、断ち割って調査したところ、粘土内から黒曜石製の石鏃破片の他に、弥生土器もしくは土師器の破片が出土したため、SI 5 に伴うものではないことが判明した。土器は細片であり時期は特定できない。性格も不明である。(君嶋)

第3節 弥生時代の調査成果

(1) 概要

弥生時代の遺構として、溝2条(SD 2・3)、土坑4基(SK 4・16・20・23)を検出した。

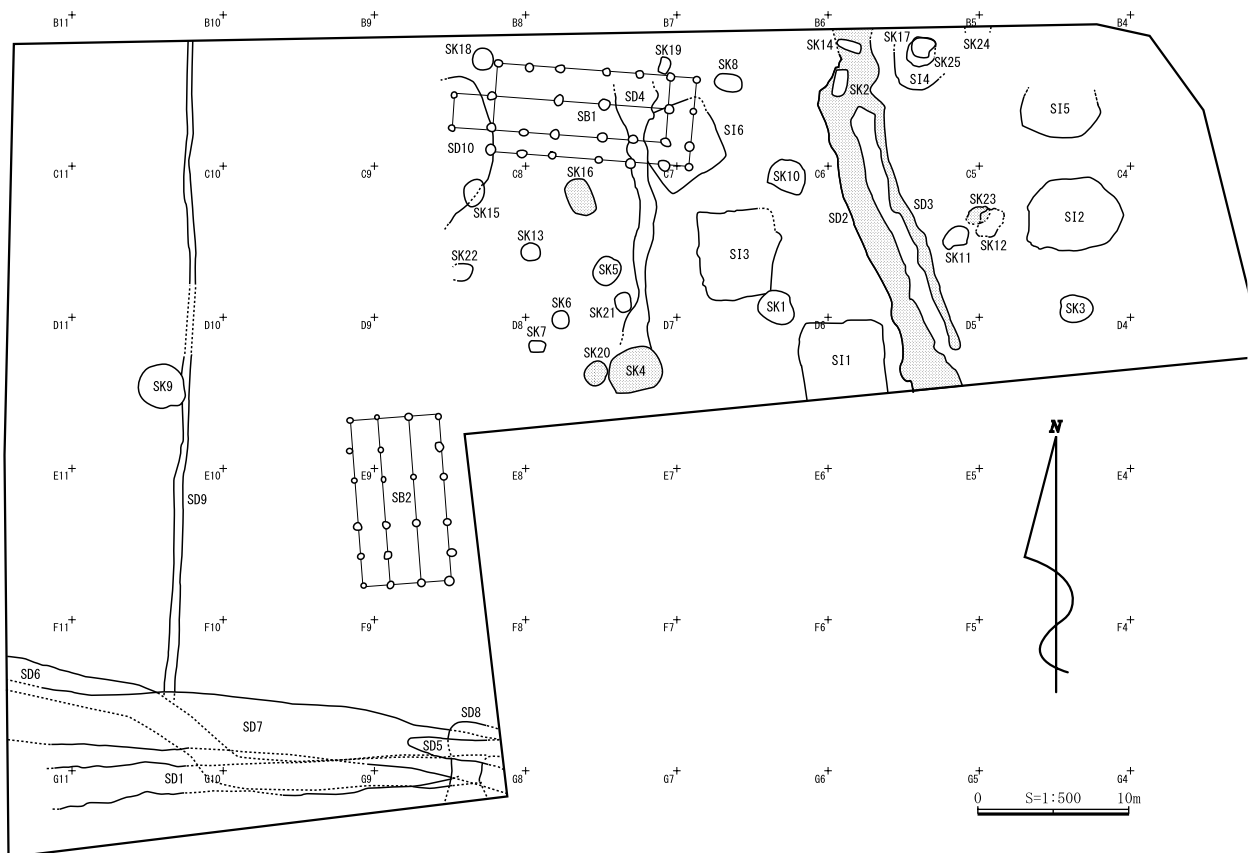
SD 2・3 は自然流路と考えられ、縄文時代から弥生時代終末期までの多量の土器を含む。また、碧玉製の管玉未成品も出土している。

4基の土坑はいずれも中期の遺構である。SK 4、SK16では礫とともに土器が廃棄された状況を示す。SK20からは石鋸が出土しており、SD 2・3の管玉未成品と合わせて、本遺跡で弥生時代中期前葉～中葉に玉作が行われていたことが推測される。(君嶋)

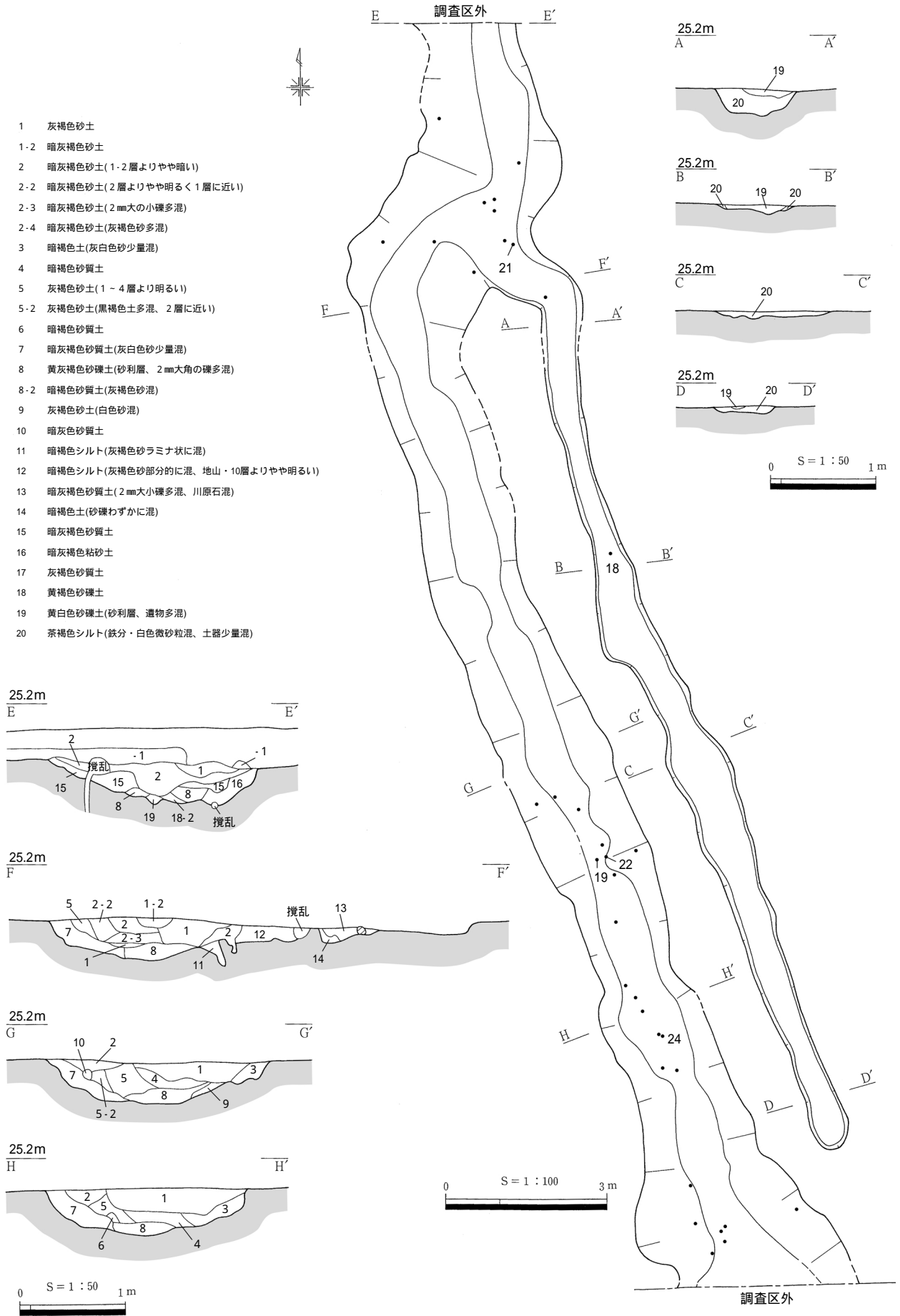
(2) 溝

SD 2・3 (第11・12・13図、PL. 6・23・42・44)

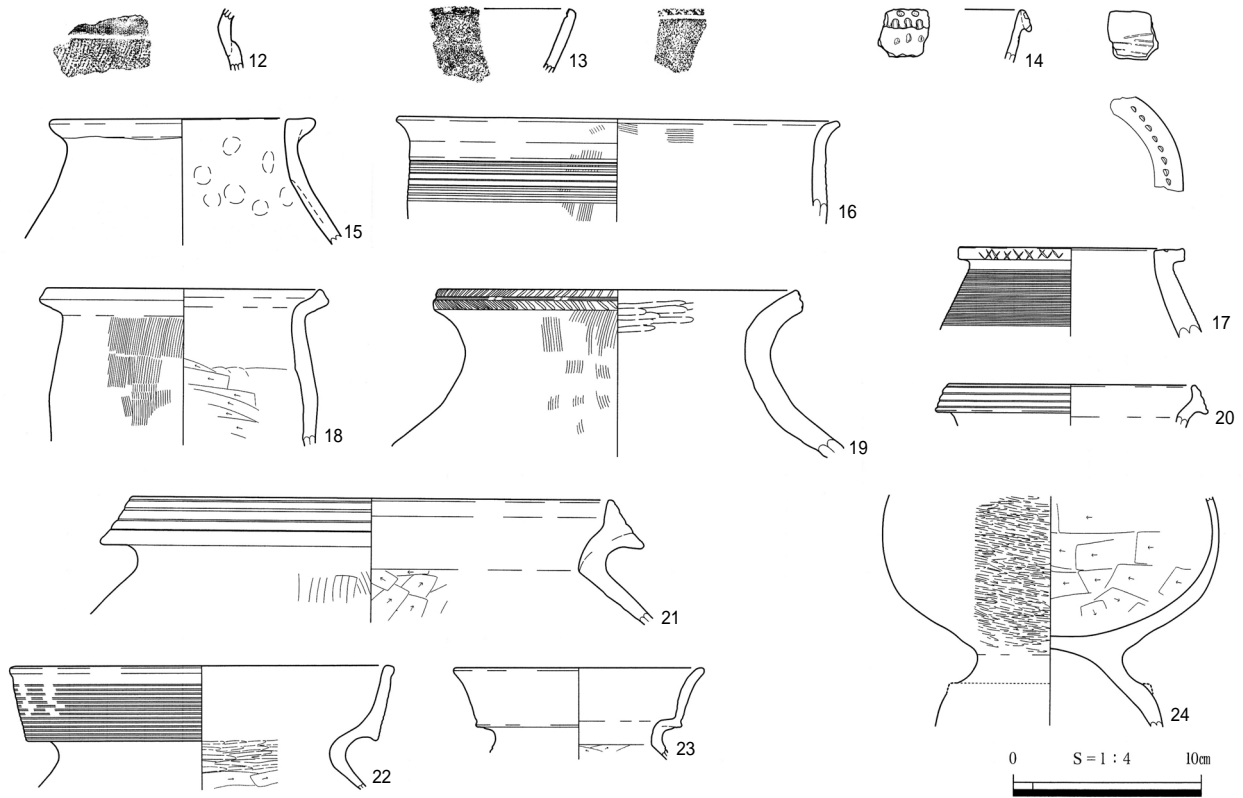
調査区の東側、B5・C5・D5グリッドに位置する。両遺構は南北方向に平行する2条の溝であり、B5グリッドで合流する。両遺構の先後関係は、面的に検出した段階で把握した切り合い関係から、



第10図 弥生時代遺構分布図



第11図 SD 2・3



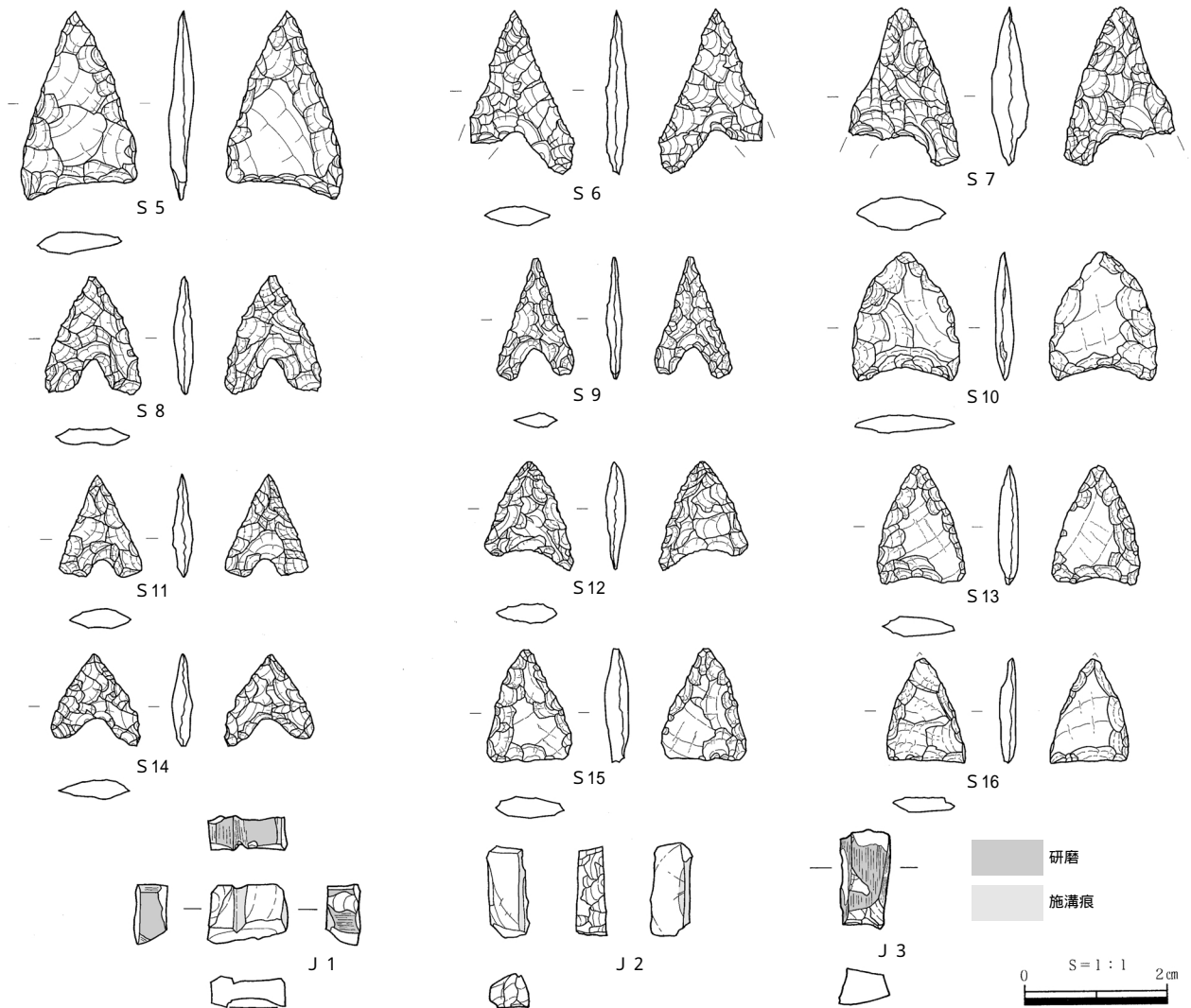
第12図 SD2・3出土遺物(1)土器

SD3が先行し、SD2が後出する。

SD2は南端と北端が調査区外にかかっており、検出した長さは約24.5mである。調査区南端から北西方向へほぼ直線的にのびており、調査区北壁から約4mの地点で北東方向へ短く屈曲した後に、再び北方向へと走向を変えて調査区外へと伸びている。幅はおよそ1.3mから2mで、広いところでは3m近くに達する。検出面からの深さは約35~45cmで、断面形は浅いU字形を呈する。溝底の標高は、調査区南端で約24.55m、調査区北端で約24.25mであり、北端の方が約30cm低い。

埋土は、上層の灰褐色砂、暗灰褐色砂層と、下層の黄灰褐色砂礫層に明瞭に二分され、かつて水が流れていたことが窺える。先述した溝底のレベル差から、周辺の河川と同様に北流していたものと考えられる。また、下層は厚さ15cmほどの堆積であるが、粒径の粗いいわゆる砂利層であり、拳大~人頭大の礫も多く含まれていた。このことから、本遺構形成時の流れはかなり流勢が強かったものと推測される。

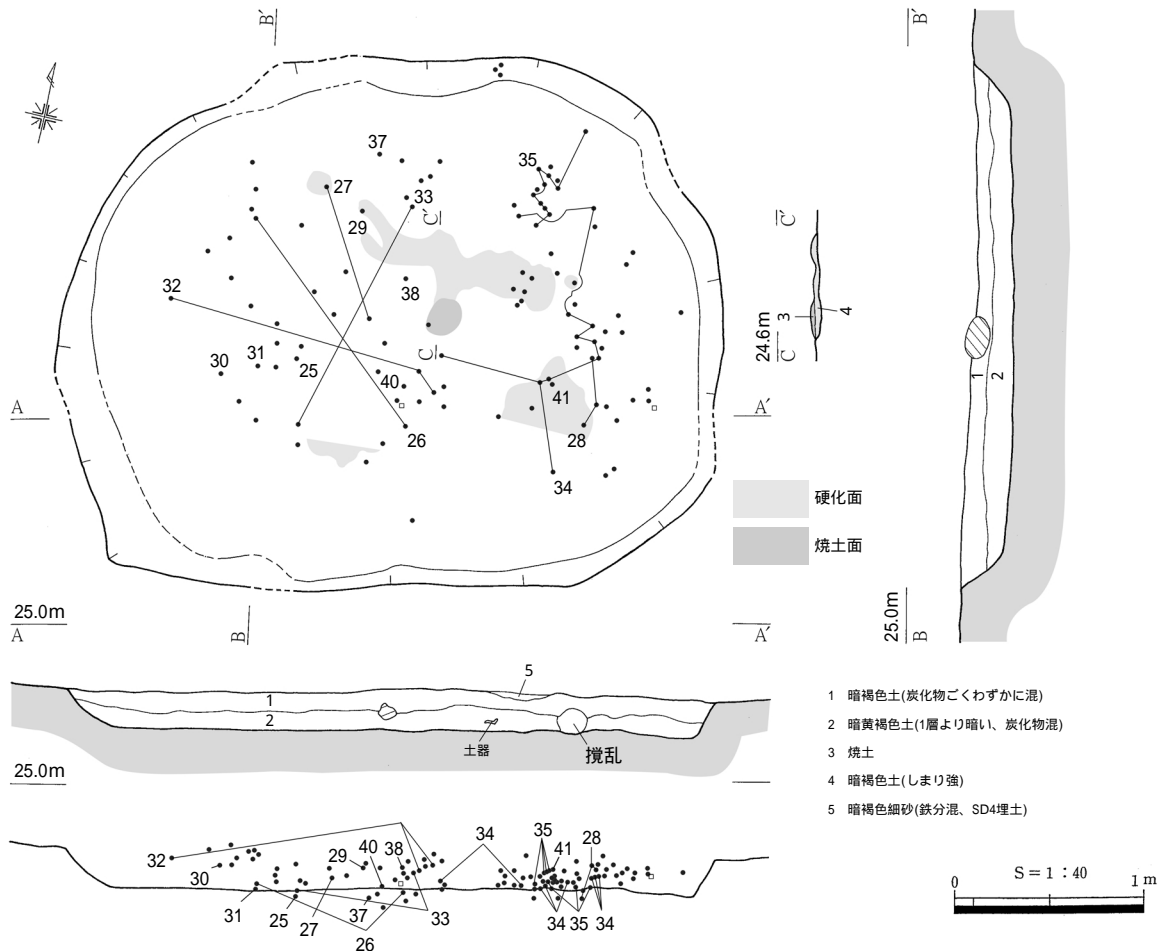
遺物は、埋土中から多量の土器片が出土した。特に下層からの出土量は膨大で、コンテナ数箱分に相当する。遺物の時期別にみると、厳密に計量してはいないが弥生時代後期のものが最も多く、縄文時代後期、晩期、弥生時代前~中期のものを含む。これらのうち、各時期の特徴を示す代表的な個体を選んで第12図に図示した。最も新相を示すのは甕23など弥生時代終末期(様式)のものである。なお、遺物は上層と下層とに分けて取り上げたが、下層からも弥生時代後期の土器が出土しており、遺物の新古と層位とは対応しない。古相を示す遺物は、弥生時代終末期に溝が形成された際に、上流側、すなわち調査区の南側に存在した弥生時代中期以前の遺構ないし包含層から流されてきたものであろう。土器片はほとんどが小片であるが、摩滅はそれほど顕著ではなく、壺19や脚付壺24など、遺存度の高い個体もわずかに含まれる。したがって、遠距離を流れてきたものとも考えにくい。



第13図 SD 2・3 出土遺物(2) 石器、玉類

土器以外の遺物では、黒曜石製、サヌカイト製の石鏃が出土している。また、注目すべき遺物として管玉未成品があげられる。図示したもののうちJ1、J2には施溝痕が認められ、施溝分割によって板状の素材から角柱状の素材を形成する過程で廃棄されたものと考えられる。一方でJ3は打割分割によって成形された角柱状の素材であり、管玉の製作技法において異なる2者の存在を指摘できる。両技法は盛行した時期が異なるが<sup>註)</sup>、先述したとおり本遺構では縄文時代～弥生時代終末期までの遺物が混在しており、管玉未成品についても帰属時期は明らかにできない。なお、これら管玉未成品3点の石材産地については、蛍光X線分析によりいずれも菩提、女代南B群に属する碧玉であるとの結果を得た(第4章第4節参照)。その他に、図化するに至らなかったサヌカイト、碧玉の極小剥片(チップ)も多数出土している。

SD 3は、SD 2の約1m東側をほぼ直線的に併走し、調査区北壁から約4.5mの地点でわずかに屈曲してSD 2に合流する。幅は40cm～1m、深さは5～45cmであり、SD 2よりも小規模である。埋土は2層に分層される。上層はSD 2の下層に類似した砂利層であり、遺物を多量に包含する。下層は鉄分の沈着もみられる茶褐色シルトで、いずれも流水の痕跡をとどめている。部分的に上層が認められない箇所もあることから、上半部は削平を受けているものと考えられる。溝底のレベルは、南端付近で標高約24.9m、合流点付近で約24.5mであり、SD 2と同様に北側が低くなっている。



第14図 SK4

SD 3は、先述した切り合い関係によりSD 2に先行するが、出土遺物の様相はSD 2と同様であり、弥生時代終末期までの幅広い時期の遺物を含んでいる。したがって、SD 2とSD 3は、ともに弥生時代終末期の近接した時期に形成された自然流路と考えられる。(君嶋)

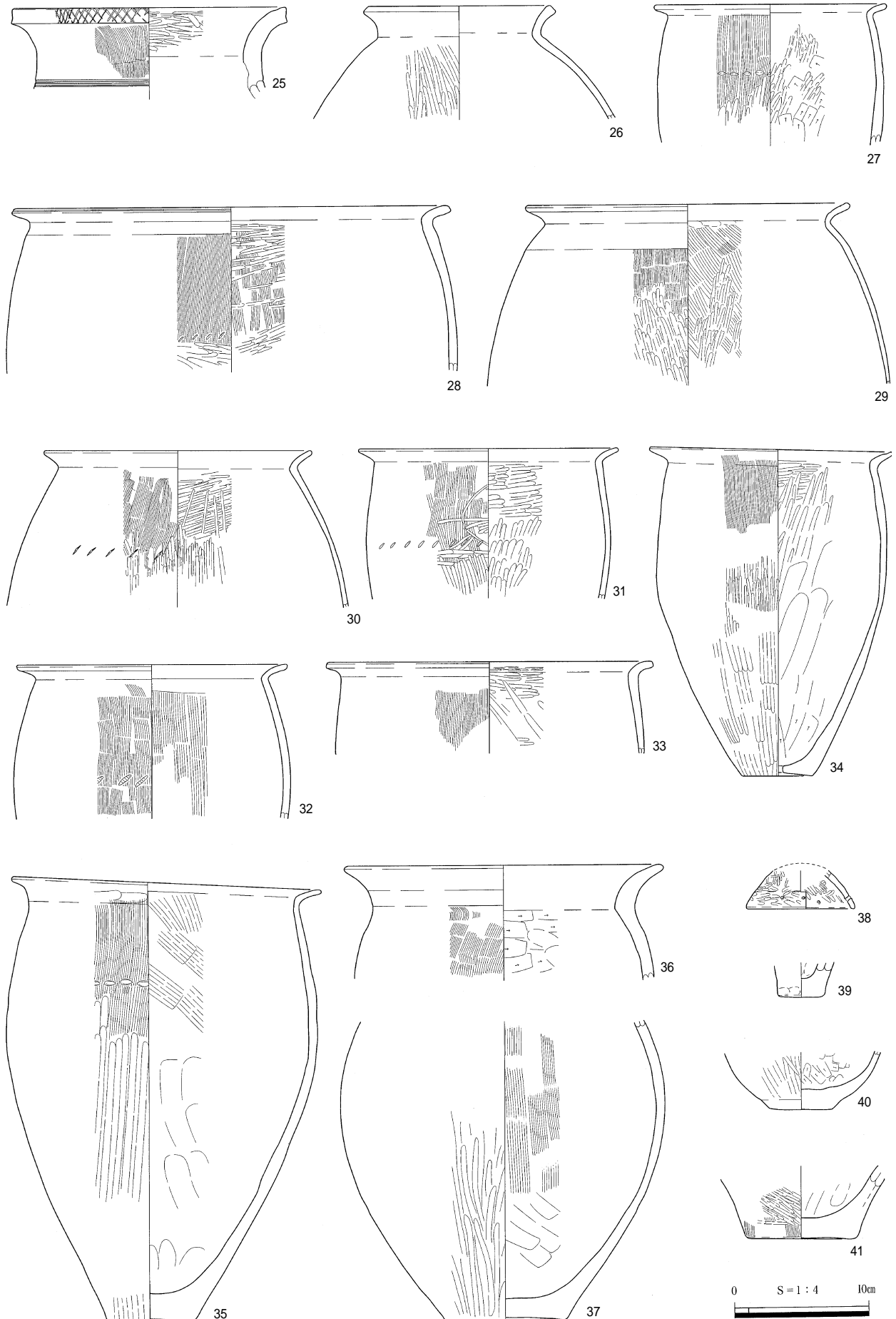
【註】増田浩太 2004 「第2章第2節 鳥取県」『古代出雲における玉作の研究』島根県古代文化センター。この中で、伯耆地域では弥生時代後期前葉から中葉頃にかけて施溝分割技法から打割技法へと変化すると整理されている。

### (3) 土坑

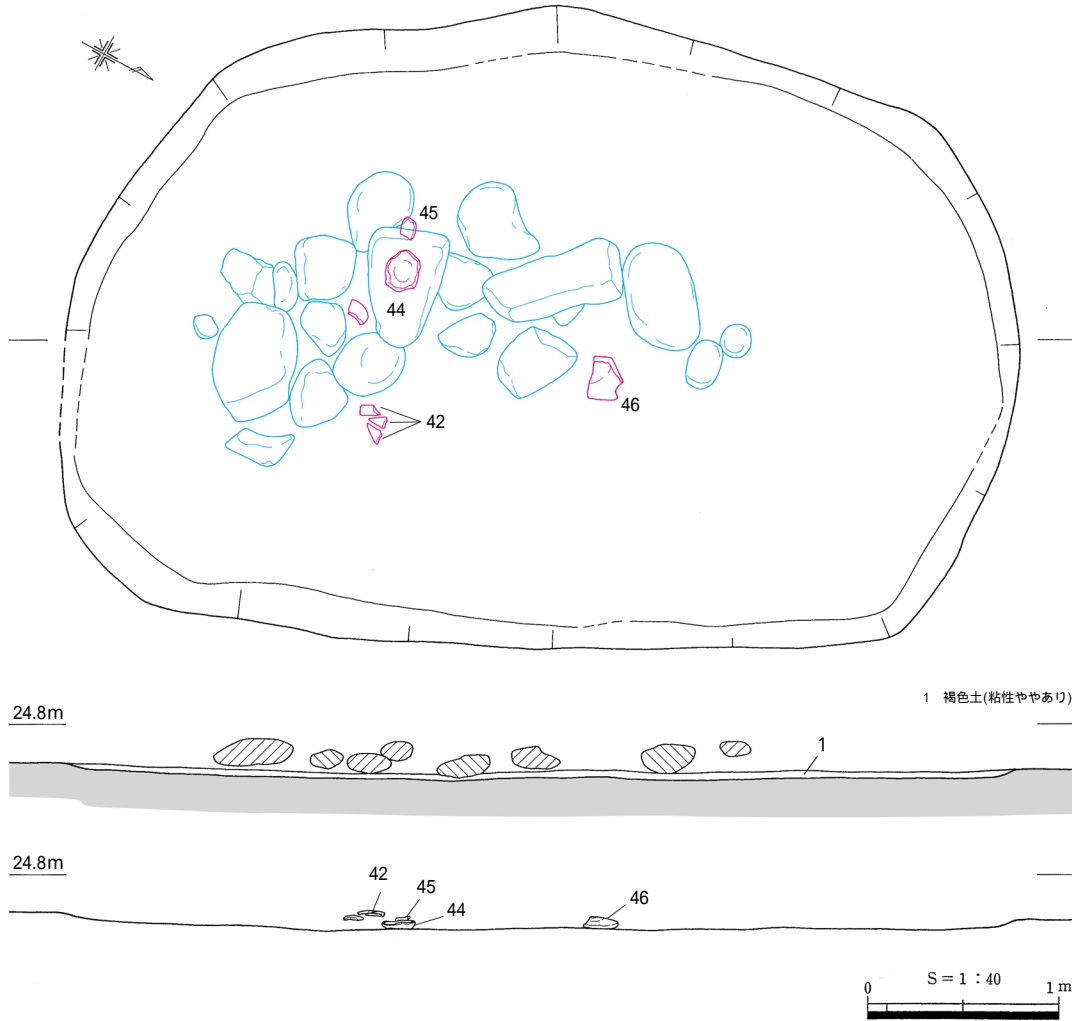
#### SK4 (第14・15図、PL.7・24・25・26)

D7グリッド北東寄りに位置する。SD 4に切られるが、SD 4自体が浅い掘り込みであることや、後述する土器の遺存状況などから、大きな削平は受けていないと考えられる。検出面での平面形は長軸約3.5m、短軸約2.8mの楕円形を呈する。検出面からの深さは最大で約25cmを測り、断面形は逆台形である。底面は長軸約3.2m、短軸約2.5mの楕円形を呈し、ほぼ平坦である。埋土は暗褐色土、暗黄褐色土層が主体で、いずれも炭化物や拳大の礫を少量含む。土坑底のほぼ中央部において厚さ1~3cmほどの焼土面を検出し、さらにその周辺には部分的に硬化面が認められた。

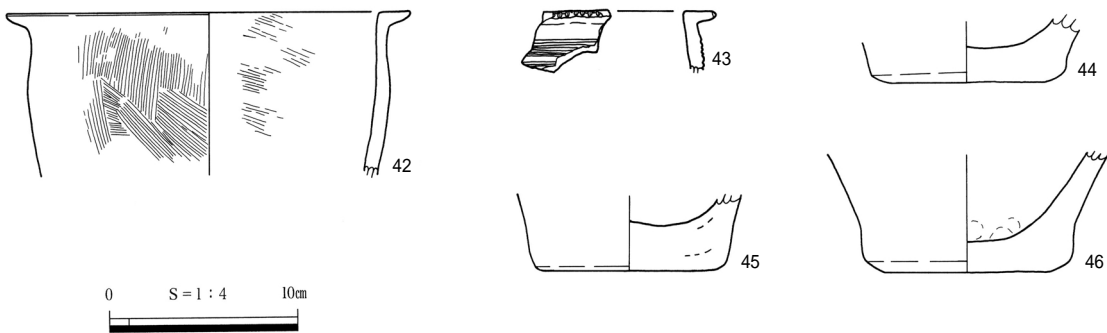
埋土の上層から底面直上にかけて、夥しい量の土器が出土した。土器は焼土面の周囲に集中している傾向がみられた。破片のものが多く、最小個体数にして20個体以上に相当する。完形に復元できるものはないが、34、35など遺存度の高い個体も含まれる。土器の器種には偏りがみられ、甕が最も多く、そのうち大部分は胴部外面に煤が付着している。また、34は底部に焼成前の穿孔がされている。



第15図 SK 4 出土遺物



第16図 SK16



第17図 SK16出土遺物

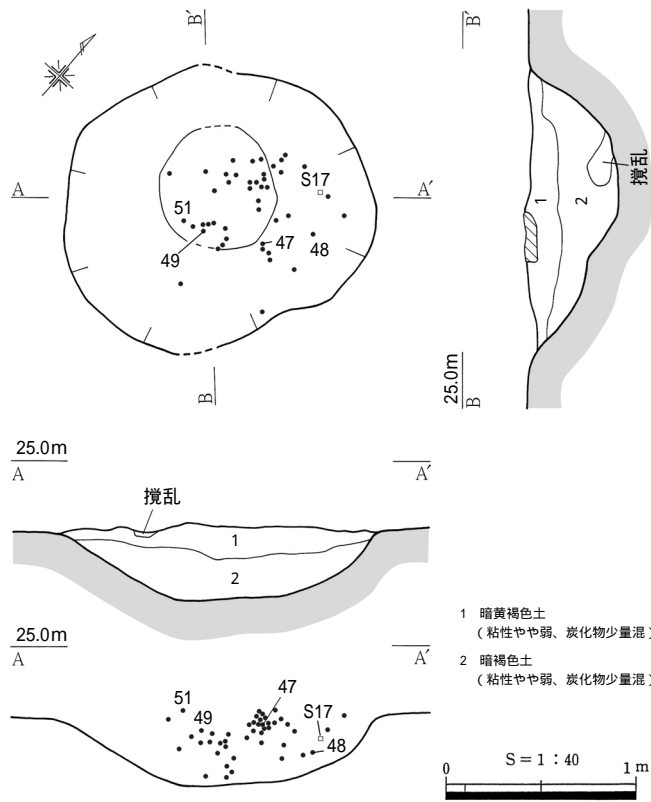
36は古墳時代後期以降の甕形土器であり、SD4に伴って混入したものと考えられる。これらの出土土器は - 1 様式の特徴を示すことから、遺構の埋没時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

土器の出土状況から廃棄土坑と推測されるが、焼土面や硬化面が存在し、土器の出土位置が偏っている点からは、単なる廃棄土坑とは考えにくい。短期間のみ使用され、廃棄された小型住居跡としての可能性も考えられるが、中央ピットや柱穴、壁溝などが検出されなかったため明確にはできない。

(山根)

SK16 (第16・17図、PL. 7・26)

C7グリッド北寄りに位置する。検出面での平面形は長軸約5m、短軸約3.4mの楕円形を呈する。検



第18図 SK20

出面からの深さは約3cmしか遺存しておらず、上部がかなり削平を受けているものと推測される。底面は長軸約4.8m、短軸約3mの楕円形を呈する。埋土は褐色土の単層で、10～60cm大の礫を多量に含む。礫は丸みを帯びており河原石と考えられる。

遺物は、礫と礫の間、および礫の下から土器が出土した。甕43は口縁外面に刻目、胴部上半に櫛描平行線が施され、42とともに逆「L」字状口縁をもつ。礫の下から正置された状態で出土した44は甕または壺の底部で、胴部を意図的に打ち欠いたものと考えられる。土器は 様式の特徴を示すことから、遺構の埋没時期は弥生時代中期前葉と考えられる。

礫や土器の出土状況から、何らかの祭祀に関わる土坑の可能性はある。(山根)

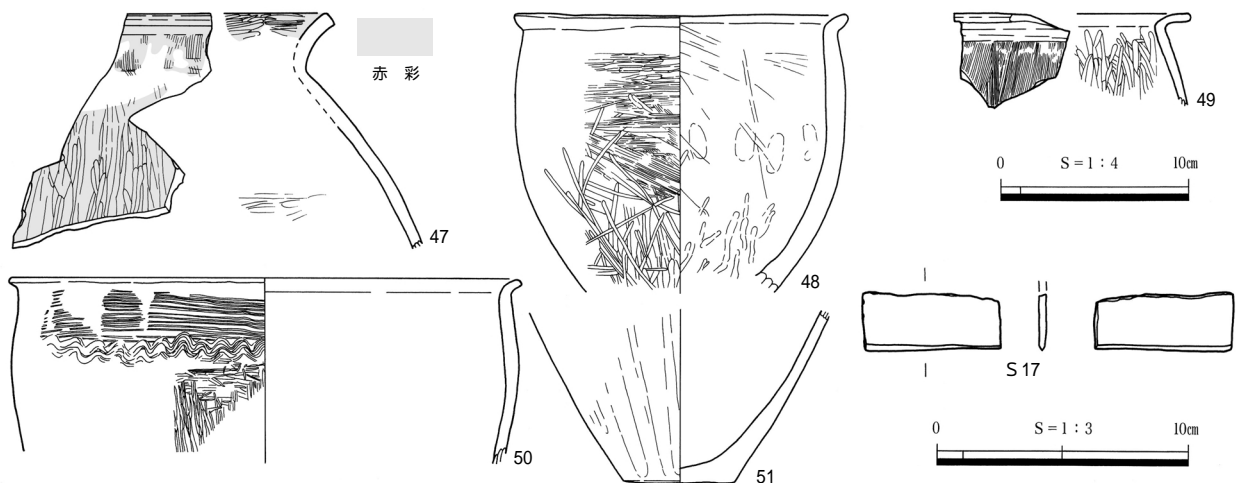
SK20 (第18・19図、PL.7・26・44)

D7グリッドのほぼ中央に位置する。検出面での平面形は長軸約1.6m、短軸約1.5mの楕円形を呈する。検出面からの深さは最大で約50cmであり、断面形はすり鉢状である。底面は長軸約0.8m、短軸約0.7mの不整な楕円形を呈する。埋土は暗茶褐色土層、暗褐色土層に分かれ、いずれの層にも少量の炭化物が混じる。

遺物は埋土中から多量の土器片および石鋸が出土した。遺物の時期は、甕48、50が 様式、47、49が 様式に近い特徴を示すことから、遺構の埋没時期は弥生時代中期中葉と考えられる。また、本土坑からの石鋸の出土は、本遺跡における玉作が中期前葉ないし中葉にさかのぼる可能性を示唆するものである。

土器の出土状況から廃棄土坑としての性格が想定される。

(山根)



第19図 SK20出土遺物

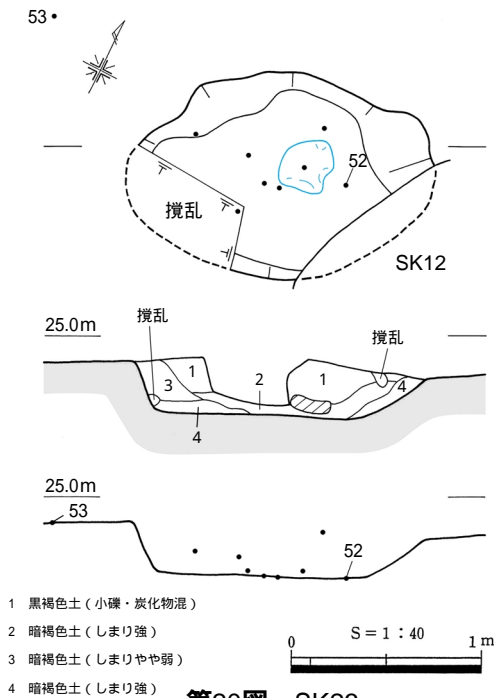


SK23 (第20・21図、PL. 7・25・26)

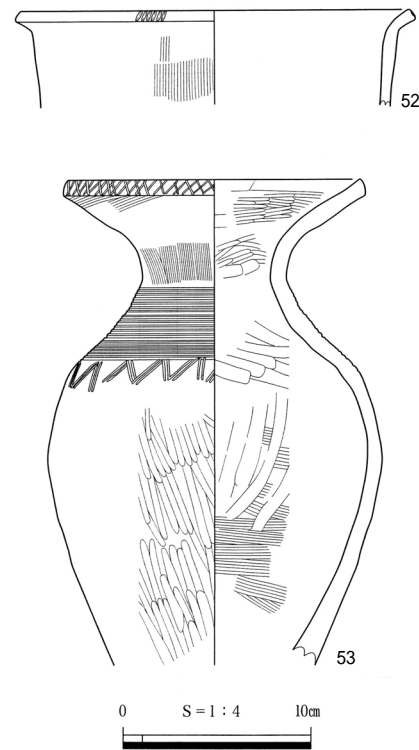
C4・C5グリッドの境界付近に位置する。主軸を北東 - 南西方向にとる楕円形を呈し、長軸1.5m、短軸1.1mである。東側を中世の土坑であるSK12に切られ、また西端は攪乱によって破壊されており、遺存状況はよくない。検出面からの深さは最大で約25cmであり、底面はほぼ平坦である。埋土は地山に似通った黒褐色土、暗褐色土を主体とする。1、2層は、3、4層の堆積後に掘り返したような堆積状況である。埋土中からは土器の小片数点が出土した。また、底面近くから扁平な人頭大の礫が検出された。図示した甕52は底面直上から出土したもので、様式の特徴を示すことから、遺構の埋没時期は弥生時代中期前葉と考えられる。

なお、本遺構の西縁から北西方向へ80cm離れた地点において、壺53が検出された。口縁部から胴部までの半周ほどが遺存しており、遺構面上に横転した壺の上半が削平されたものと考えられる。時期は様式に位置づけられる。また、周辺には人頭大の礫が散乱していた。同時期の遺構であるSK23やSK16からも同大の礫が出土していることから、本来は遺構に伴っていた遺物である可能性が高い。

(君嶋)



第20図 SK23



第21図 SK23出土遺物